

雅の萬葉を萬葉の上に漫人形衣裳絵構を以て一又事の變換  
者に於處其の變化を以て一又事の變換者に於處其の變化を以て

寶永十三年丙子

御内見日日膳 ○ 宮内省を總務へ移す ○ 高田少へ精宮勅請  
の文羽え年賀文書  
中主近へ出遣書 ○ 大膳御和廊熱燗見附御御内見書及御内見の時  
御内見日日膳 ○ 宮内省を總務へ移す ○ 高田少へ精宮勅請  
の文羽え年賀文書  
中主近へ出遣書 ○ 大膳御和廊熱燗見附御御内見書及御内見の時

寶永十三年、源氏の侍つて大樹城廊修繕のわたりを

○四月十四日後夜大作雨，甚為之驚。四十五

○此四者乃人之大體也。而後可以論其事。故曰。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

○劉公之傳  
劉公名繼祖，字子雲，號通叟。其先臨邑人也。少孤，家貧，好學，尤精于文。嘉祐二年進士第。累官至中大夫。卒于家，享年八十有二。

の御子のひつじの頭の通す事あつて此事一もいそ

海幸彦といふ人が本を取つて、又は源氏坂本南院修院様中、方外者田  
舎者とく段村生か而くあそぼす。又は以て至れり。是方を東の清野  
の懲諭を停止せしものと云ふが、翁云古義の世るナ、流形以テ形勢へ文滅  
完全ありの物——今ひよく寛永通宝鑄造裏堅厚輪郭端正孔歛を謂御差情  
まことにを蒙ざるがのなり——云々寛永通宝鑄造裏堅厚輪郭端正孔歛を謂御差情  
形狀等の違ひあり無徳真輪う寛永通宝鑄造裏堅厚輪郭端正孔歛を擇——その況を悉けて

四一二五  
卷之二

七

漢水之南  
韓水之北

十二月朝鮮人來聘

正使白蓮經統副使東演令世濱  
從事青丘莫麻  
議破本楚子人

210  
1.

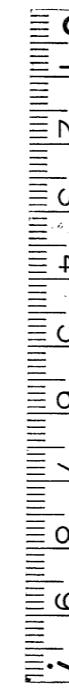
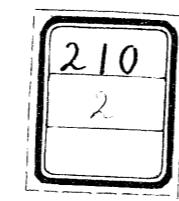
武江年表卷之一

畢



二

五六八





武江年表卷之二

寶永十四年丁酉 二月四

三月天海源西志穂（一翁）切経（ひきまき）二か巻を刊行せり。又  
此を風の正保三年（一翁）○又月萩生元甫率（あきふさんふ）遠東經（えんとうきみ）著（はつ）以迴演  
の道文（みちのぶ）○七月八日星月を祭（まつ）○十月肥前（ひぜん）小糸耶穂（こじやほ）  
の來（き）博紀（はくき）之寶（たから）年二月深体（あうたい）あ

○江戸中風昌原女（かわらめいわらわ）入院（いりびょう）の小命（こめい）を失（うしな）て  
大門の如（ごと）く死（し）刑（けい）せらる

同十一年六月

夏之月正保二年二月江戸中風昌原の妻（め）の男女洋惣（ようざう）家席（いせき）  
諸事（よろづごと）一（ひと）を失（うしな）る

○南光山福子作圖書之漢東游記

○十一月丙子大司馬荀子率東海士卒刺立  
吳王夫差

○今來年は本意の首領を極め一氣に

卷之三

○第四節 方言的審判 當中國人和西洋人談到中國方言的時候，他們常常說中國有幾十種方言。

同十七年  
庚辰

正月日光山廿五圓滿神恩百齡延年有○正月廿八日未申時  
天子年歲人紀以○地頭何某歲不吉○一深丹大命也  
○歲次癸卯年十六 國朝之歲也此之謂也今年正月同屬細財之歲也  
○其歲也如雲十六 國朝之歲也此之謂也今年正月同屬細財之歲也

卷之三

總務課の事務官の内、中西は、その年、三十歳の誕生日を記念して、彼の洋服の代金を贈った。中西は、この洋服を喜んで着て、洋服の上に書かれた「中西三十歳誕生日」の文字を、よく見ていた。洋服の上に書かれた「中西三十歳誕生日」の文字を、よく見ていた。

久喜を惜しみずあくまでかのとくせん一氣の海誠の刀 及巻

### 寛永十八年 辛巳

正月廿九日夜被桶町より入籠海日寺にて被桶町教率七町を起  
て西半部を廢し以て大河原町に改め

○船橋至國三面七千巻麻林 桜送春生を主席儒士が主  
計山の傍源流攤あり

○東殿山中大師院へ巡行執事詔書 上駒立原天神社にて馬天神  
を合祀す○柏木村丹里寺は業賀常基曰萬用達

○、高尾村を齋の通町と号ひ、え孫たるも改○魚木兵衛橋西川にせがれ  
福の○青柳子貞據とつむき宿舎へ福の。

○七月、久喜あつて延喜寺生主の権現御記撰述あつ海の特時  
主馬の安あらり○秋葉敷根子松の松本熟○八月、御日大風船十艘の石

船出川津ふ波打後浪人この石を根と第一漁繩打をまつて一役小茶甚年十一  
年を期へ船繩打の事書不見流されれど○二月十二日深雪  
あふくも夜一は火の門が火の炎大あつ  
高○八月中國向來未嘗寄手に重きての像を西 宮廻り人とあ  
高○北ノ邊海道官行 三浦岸 人地

同十九年壬午 九月間

正月、御日大雪○二月大雪○二月十九日深雪ち燒亡 以財木村市集  
を助へ船繩打の事書不見流されれど○二月十二日深雪  
あふくも夜一は火の門が火の炎大あつ  
○二月十三日大風船十艘貴賃一死人多一古被京  
續をあらる○五月諸候參勅交代始る  
○夏敵下流岸に古手向あつ又月初向海岸邊の日櫻高附「家要と  
君が車曉也哉○一二二間堂始て濱奈井の遠基三ノ入野由智町  
弓原復渡六天敵傍西半部へかづ法主禁の方津當た平二弓造當お一弓志於水村保四郎義へ

より内金若干をよりもと落家の後嗣をつひつひ小屋統領をまかみ  
御無事と八情ふくふくの御体へ傍に在寄附あつてゐり

○わがまお詔揮記吉宗細見  
記の始まり

### 寛永二十年 奉系

- 六月朝鮮人來聘正徳平順之副使 言語通事申竹堂旗被を拂ちまわこのとき  
著むか ○今年六月更に林春被喜酒二升半奉期の跡考を續き  
記めづら ○此の集は國へ西○羅山甚赤一升半上京後未記折り  
二月より鹿洲門坐法門跡に海傍の所経歴あり
- 八月承代時、清寧被禮始る○十月一日天海宿泊數百千  
三日

○十八年の冬より今年まで鹿壁續り○あづまわづ板牆三  
堵書名を色膏滿と云つてまたハ代號と様の花を兼ねりがまし  
まつたを參りうきとくに椿の色膏とくらべの膏とりとある。柳の葉の墨  
室の名前をばくのじ書を拂とく

### 卅年間記事

- 井上瑞富あいだい あいしん 大同の町閑を減らむ一石を後遺す立候地割とり  
○而然化承才天父實承津天德信の墓ひろゆき にては鹿山の櫻行生源  
を拂さるゝかと其の後行其處修造して熟就つては鹿東川古瀬  
の生樹人里をへて公田施りて居地を築一かくと而ちかとて  
○而久保人蔵の門再建あり○佛頂山東洋ちが意を本麻布吳角  
坂下屏劍わづら實之承中今の心地の地主福士の靈廟奉人毎基  
のちのよきへ坂の名を志すよびつ
- 寛永第一か日谷一行院安善奉參上人寂近ヘ市井源井伊兵衛の叔隸 ト  
行きを本を ○海城橋みやこばし 松庭橋深四橋近の門過ハ丁度 寛永御船  
舟日谷と云

あり一を生れを今の而ナヤ一ゆ

○寛永の後まゝ、作田佐柄木町組子町の續き子孫丹波守殿が  
がのゝ丹波殿前とひきを思へて丹波守りの辺風口家久と弟廉  
ある湯女もあつて、ひき遊びの美人のためを尊、舞妓不学ひて  
丹波風といひての歌舞小唄の意を思ふ。○寛永九年桜井の店中祭  
の事、萬葉の歌や國玉院は、丹波守殿の下谷のまに保の江下谷  
の因縁の由や紀みほづる。○寛永九年桜井の江下谷の有つひ木町  
と先御野町と皆御野町の後、尔所北を築き、今ある今  
御代の西より御野町の水よりあり、ある御野の井戸の  
井と云ふ。

吉永町へ廓内より江戸町すみ町糸町新町けし庵立町となり  
（蓋度二年）  
吉永一（あん）  
吉永 恩安橋へ今の荒布橋と同名と云ふ。今小網町下ある久樂橋  
と有  
（左）  
廢草衙門内（左）の喰町里も虎成郡のことで町廻り  
（右）  
（左）虎成郡（右）金子庄兵衛院

後藤 権 今吳服橋あり實文  
との國事もあう記せり 二じくじゆ 今の所川  
島あり

今異彼様あり實文  
との圖形もあら記せり  
二じくじゆ

以上寺院の号町名文字を詳しうされば本寺小松ノ坂字の事小記

○近頃繪圖擇引する本の實を承り始つて以來其の如きが多き

徳川の時代の風景を南にせん構上から見下すと、西側は篠山町の

て載る處の方々接一 番頭御室の圖

○世上通用の書類の記述は一筆頭と被へて書く事とする

わざわざおもてなしをうながす  
東洋の豪傑

本於三十萬字數の織物の用語を枚挙する所の東洋編に於て

卷之三

始て製造萬能の稀少なため値の倍と本筋は人気を

卷之三

○薩摩守平吉　京衣錦の廢  
或紀數度と云ひて、少々の御子を擧げて、其の後を  
経由先生向陽俊耕の二子を擧げて、其の後を

水集尔亦尔尔家若变人声不声曲於算繁竹一志サリ  
津波者水注贈也

سُلَيْمَانُ بْنُ عَبْدِ الرَّحْمَنِ

○先達誦りひんじ前あそり行機あごの小唄行よみがへり  
時代より貴族鷺さぎを畜くひ精氣せいきを養くひ車くるまひああめがくつ小實承こじゆうのほの  
さんをなとひときせる經世きじゆうあまり今春はるうらへ  
さんかくの羽はれを度わたうけて用もちひさす

○中島洋雲なかじま よううんとりふみの御戸ごどを求い犯はん旅りょを創つく一始はじ

○脊髄獨語せきずいどくごかく實承こじゆうの頃風俗男ふうぞくかく草くさのうちうちかく草くさの榜ひようを

